

「暗夜行路」の「お栄」について

——「少し型に終った」原因——

福田 金光

On “Oei” in “An'yakōro”

Kanemitsu FUKUTA

I お栄に関する問題点

1. お栄は暗夜行路の中で、主人公時任謙作に次ぐ重要人物である。「序詞」から姿を現わし、前編・後編を通じて十数回、謙作と密接な関係で描叙されている。謙作の妻となる直子は、後編第四章から登場して従兄との間に事件を起こし、夫を懊悩させて大山に赴かせ、終章ではお栄の存在をも謙作に想起させない唯一人の重要人物となるが、全編における質と量からいえば、お栄を超える存在ではない。

2. そのお栄が「よく書けていない」とは、多くの批評家の指摘するところで、いち早く正宗白鳥は

¹「……二三の芸者の描叙はあれでいいとして、肝心なお栄といふ女がこの前編では殆ど書けてゐない。旅から帰つた謙作を迎へて『お祖父さんに似てる』と不用意に云ふところなど活写の妙を得てゐるが側面から取扱はれるにしても、もつと面目を活躍させられなくては、この長い小説が生きて来ないではないか。主人公が知らず知らずお栄といふ女の方に落ちて行つた気持は、表面は非常識なやうだが、男女間の宿命的の探さを持つてゐるやうに感ぜられる。従つて、作者はこの女を重要視しなければならない。」といっている。

3. また、中野重治は「暗夜行路雑談」で「拵えものという側からいへば主人公謙作の兄の信行というものがそもそも余り都合よくできている。」と述べた後で

²「肝心のお栄に、死んだ祖父の影もささぬということなども虫のいい話でなければならぬ。」

と、その人物造型のご都合主義を難じている。

4. 志賀自身も「続創作余談」の「モデルに就いて」で

³「お栄といふ女は性格的には全然モデルなしに終つた。お栄の境遇は或女から聴いた其女の経験を出るだけ利用したが、性格の方は全然見本なしだつた。それが自分でも少し不安だつたので、長与に話したら、書いて行くうち自然に決まるだらうと云はれた。長篇では長与の方が先輩だから、さういふものかと思つてゐたが、前篇だけを新潮社から出した時、正宗白鳥氏が評して、お栄といふ人物が曖昧だと書いてゐた。お栄は後篇にも出て来るが、彼女の境遇は自分の小説には少し風変りで、興味を感じてゐるが、人間は少し型に終つたやうな気がしてゐる。」(下線筆者)と、正宗白鳥の評を前編に限っては素直に聴き、後編には、風変りな女の境遇を入れたから、曖昧さは減じたはずと弁解しながらも、「人間は少し型に終つた」と自ら認めている。

5. 批評家の多くは、直子の描叙については、賞めこそすれ、非難はしていない。谷川徹三氏は『『暗夜行路』覚書』の中で、

「私は日本の小説に出てくる女性で『暗夜行路』の直子のやうに魅力のある存在をほかに知らないほどである。このタイプの女性は志賀さんの短篇にもたびたび出て来る。しかし『暗夜行路』に於いてのやうにその全身像を示してゐるものはない。直子は少しも理想化されてゐない。少しも非凡なところはない。むしろ最も平凡な女性である。最も平凡な女性として最も平凡なあやまちさへ犯す。それでゐてその全体の姿は清らかでいふべからざる美しさをもつてゐる。」

とまで称揚している。この直子については、前記の「続創作余談」に志賀も、

「直子はなるべく自分の家内にならぬやう、最初は体格など^{まる}全く別の人物に書いてみたが、いつか段々家内に近い人物になつて来た。然し自分ではあれはあれで、一人の別な人物のつもりである。境遇はお栄の場合と反対に全然作りものだ。」

と記しているとおり、モデルは夫人康^{さだ}に近い。

彼女は志賀とは再婚で、その時、亡夫との間の6才になる娘喜久子があった。志賀は父の反対を押し切って結婚したのであるが、かつては人妻で子さえ現存する康の過去は、やや質は異なるにしても、直子と要の一回こっきりの過失よりは根が深い。また、既に明治44年1月23日の志賀の日記に、

「岩倉と岩倉の妻君との関係を見、有島と有島の妻君の関係を見て、自分には結婚の生活といふものを快いものに考へる事ができない。再縁の善良な女はとも思つてみる。」

とあり、初婚よりむしろ再縁の女性を希望していたにしても、康が気に入れば入るほど、その過去は志賀の心中で改めて大きな問題となつてきたかも知れない。その実際体験のうえに直子が書かれたと考えると、この作者の素質が最善に生かされて、谷川徹三氏のいうような、日本の小説で類例のない魅力のある女性を造型することができたのであろう。

6. 志賀の言に従えば、お栄は直子と反対に、境遇だけが違って、モデルがなかった。「書いて行くうち自然に決まるだらうと云はれ」て拵えて行き、「少し型に終つたやうな」女性になつてしまったのがお栄である。

確かにお栄は、成り行きに従つて造型されていったので、前編と後編とでは、イメージが相当異なる。後編では「人がいいだけで馬鹿だ」とあるが、前編には人柄のよさの印象はあつても、決して馬鹿などではない。

また、全篇を通じて、その出現回数に比べて印象は薄く生彩に乏しい。これはモデルがほんとうになつたためか、それとも鮮明に描いては重大な支障の生ずるモデルがあつたからか、何人かのモデルがあつてそれが統一できなかつたせい、あるいは他に原因があるのか、精密な検討に値することである。

お栄は、主人公を除いては最重要人物であるだけに、暗夜行路の主題その他を解明する最も必要な鍵の一つであるからである。

II お栄に関する諸家の説

1. 志賀の「創作余談」によれば、

「主人公が前半で母の不義の子である故に苦しみ、後半では自身の細君の不義で苦しむ事を書くつもりだつた。」

とあり、作者としては、不義の親をもつ子、不義の妻をもつ夫の苦しみを書くことが主意であったとしている。とすれば、お栄は単なるワキ役に過ぎない。

2. 関良一氏は、

「つまり、『暗夜行路』は典型的な近親相姦の物語であり、それがこの作品の最大の特徴だ」そして「主人公の母の『不義』の相手は舅であり、妻の相手は従兄弟であり、主人公は祖父（実は実父）の妻に性的衝迫を覚え、彼女との結婚を決意している。」

と述べ、母—実父—お栄……主人公—妻—従兄弟の連鎖関係を最重要視している。この場合、お栄は、実現には至らないが主人公の義母として、その不倫の対象となり、不義よりむしろ事の意義は重大である。

3. エドウィン・マクレランも、

「彼の疎外された存在において、母親の亡霊だけが彼の所有する唯一の自己確認の実体であった。だから彼がお栄（彼の祖父の、つまり彼の本当の父のめかけ）を欲しいと思ったとき、彼は実はその亡霊の代用としてお栄を得ようと試みていたのである。自分よりずっと年上で、しかも自分の本当の父と寝たことのあるこの女から彼が望んだものは、単に愛情だけでなく、一種の近親相姦なのである。彼女に対する彼の欲望の烈しさ——その彼女はけっきょくは余り魅力のある女ではないように描かれているのだが——はきわめて自然なものとは言えない。」

余り魅力的でない女お栄を、一見不自然に主人公が烈しく求めるのは、生母を早く失った男が、自己の生の根源を確認するためであった。生母を、幼時ほんとうに愛し愛されていたと実感したように、大人の男女としても実証したい、それによって確固とした自己の生の基盤を得たいという、主人公の深層心理が、お栄を烈しく求めたという考え方である。つまりお栄を生母の代役とするのである。

4. 精神医家鹿野達男氏は、

「このお栄という女は作品の中でいつも傍観的な立場にありながら、一番主要な役割を占めている不思議な女性である。作品の中に現れるお栄は決して下品な女ではない。寧ろ上品とっていいくらいである。無智ではあるが愚鈍ではない。作家志望の知識人である謙作の苛立った神経を常にやさしく包みこんでくれる。情緒的な豊かさにおいて謙作はお栄の上に出ることができない。謙作はお栄の胸に抱かれている時に一番安らぎを感じるのである。いわばお栄は永遠の女性像というようなものである。」

と、お栄は謙作の永遠の女性像と見ている。

5. 作家安岡章太郎氏は、

「お栄がアイマイなのは、彼女は謙作にとって永遠に“失われた母”の代役だからであり、またただ一度謙作の結婚の申し込みを断った他に、これという意思表示をしないのは、彼女自身或る意味で“喪失そのもの”の人物だからだ。」

「この暗夜行路のなかで最も愛されている人物お栄は、全体に甚だ稀薄な印象しかあたえていないようである。奇妙に心に残るものがある。いつも自分の傍にいて、絶対に邪魔にならないかたちで、身の廻りの面倒を見てくれ、包みこむような愛情で、荒あらしい性欲さえ、自然に治まるようにやわらげてくれそうな女、おそらくこれは謙作にとっても、志賀氏にとっても、永遠の女性というものだろう。こういうお栄に当る人物を、志賀氏はいったい何処から探し当てて来たのか。（中略）これに似かよった境遇の女は、水商売などのなかには珍しくな

いだろうし、外見はそんな女の話の藉りてくることも出来るだろう。だが性格的には、全然お栄とは別箇の女だったに違いない。ただそれには、お栄は単なる架空の女性像というには、どこか奇妙になまなましく、淡いひかえめなかたちでありながら実在感をもって寄りそってくるような印象がいつまでも残るのはなぜだろう。全然モデルがないという彼女の性格は、かならずや志賀氏のなかで長い間はぐくまれて作られたものに相違ない。(中略) いずれにしてもお栄のなかには、こういう志賀氏の青年時代から急に陰気なカタクナな方へ傾きはじめてた心にとって、最も必要なものが完全無欠にととのったものとして描き出されている。しかも彼女はいつも付き添いながら女としては謙作の手の絶対にとどかぬところに微笑したまま立っているのだ。こんなお栄のイメージが合う女性はおそらく何処にも実在しないはずで、志賀氏が『全然モデルなしだった』と言っているのは本当だろう。にもかかわらず私はお栄はモデルがあったと信じている。」

と論じ、「それは志賀氏の実母銀である。」と断じている。そして「このお栄と謙作との結婚は志賀氏の“いつまでもいまのままでもいい”という幼時願望の一端から出たものと私は考えている。」と述べている。

以上の安岡氏の論断に従えば、お栄がアイマイなのは、作品として当然であり、それでいてなまなましい実感にあふれているのは、志賀氏が多年胸中にはぐくみ育てた実母のイメージに囚ったから、というのである。

6. 三好行雄氏は

⁴¹「時任謙作から暗夜行路への移転に当たって、おそらくさまざまな手直しがほどこされたに違いないが、なかでもっとも大きなひとつは、お栄という人物の創造であった。(中略) 出生の秘密にかれをたちあわせる唯一の媒体として、お栄の意味はいっそう重要であった。彼女はあきらかに虚構事由につながる人間像のひとりである。」

「虚構が虚構としての意味をもちはじめたと同時に、小説は内的条件のかみあわせが決定するあたらしい方向、つまり虚構軸のうながす展開の方向を、さまざまな可能性のなかから選択できたのである。けれども虚構の主人公としての謙作とともに小説の虚構世界をささえるべく、お栄はそれにふさわしい内質をとともなう形象点をあたえられていなかった。はやく正宗白鳥氏によって立体化の不足と人間像の曖昧さを指摘され、作者もそれをみとめたようなお栄であってみれば、謙作にむかってひたすら自己の内面を閉じたのも自明である。のみならず、彼女は謙作自身がふしぎがるほど唐突に、かれの前から姿を消す。お栄の退場は、謙作にとって不義の子の意味が、したがって、小説にとって虚構の意味が急速に色あせたのを象徴する。…作者はむしろ虚構から実生活への復帰をえらんだ。」

「お栄は虚構の実質をになう人間像として動くのではなく、作品の構造的世界の作者の必要によって動かされる傀儡にすぎなかった。」

と、お栄は虚構上のカイトであるとする。そして、描写の問題点の一つとして、次のような事を例示している。

「たとえば新橋駅での最初の再会、謙作を見るお栄の眼が欠落したことで、この場面の描写がひどく浅いものになったのは問わないにしても、求婚した男をむかえる女の微妙な心理を思いやることなく、いつものお栄だったと見る謙作の不感症の根はふかい。秘密の曝露が謙作とお栄の内面にそれぞれ複雑な影を投げつつ、かれらの人間関係がもはや以前とおなじでは決してありえないという事態について、謙作はまったく無知である。」

7. 以上の諸家の説を簡約すると、お栄は、
(1)ワキ役に過ぎない。(2)不倫の対象である。(3)生母の代役である。(4)永遠の女性像である。
(5)“喪失そのもの”であり、永遠の女性であり、モデルは生母銀である。(6)虚構上のカイライ
である。

となるが、いずれも、そのように断言してよいであろうか。

Ⅲ お栄の創造過程

1. 「暗夜行路草稿1」(以下「草稿」とのみ略記)には、幼時の追憶の話が37話出ているが、この中にはお栄は全然姿を現わしていない。⁴² 紅野敏郎氏が草稿所収の全集の後記で説明しているように、尾道生活のはじまりの部分に出てくる仕事の内容は、「さういふ幼時の記憶から段々に書いて行った」といわれるものであって、「謙作の追憶」の原形ではないであろうが、それにしても、最初の構想段階では、お栄という人物は不要でもあり、考えられもしていなかったようである。

2. 「草稿12」に、

⁴³『坂口はどうしているだろう』と末松が云った。順吉は『電話をかけさして見やうか?』こういって起つと、梯子段の上のガラス窓を開けて、其所から大きな声で一番よく使ふ女中の名を呼んだ。台所口から大きな無智な顔をしたおさんどんがその顔を出した。」

とあり、また、「草稿12」を基にして書き改められたと思われる「草稿13」の、この部分に相当するところには、「それに応じて台所口から無智なおさんどんが醜いその大きな顔を出した」とあって、無智で、醜い、大きな顔のおさんどんであることが、忘れずに強調されている。

このおさんどんは、暗夜行路本文一の、坂口が訪ねて来た時に応接するお栄と、年令及び雇い女であることが似ているだけで、別人である。しかし「草稿12」の、坂口の関係したという「女は自家(坂口の)の女中頭をしてゐる君といふ四十位な容貌の悪い女で……」および「草稿13」の「女は自家の年上の女中で……」とある女を意識しての書き方であるように思われる。

3. お栄の名が草稿に始めて出て来るのは「草稿28」で、

⁴⁴「其頃謙作は彼の祖父と、祖父とは非常に年の違った妾のお栄と三人で、下谷根岸のお行の松の近くに可成り貧しい生活をして居た。」と設定され、更に坂口の小説の「四十女のいやに悪くどい氣持が可成りに突っこんで書いてあった」のを見て次第に腹を立て「三分の二まで読んでとうとうそれを畳へたたき附けた」その直後に

「彼は今更にお栄に対する感情を自分はこれまで欺いて来たと思った。自分にとっては何んと云つても初恋の女は祖父の若い妾のお栄であった事を彼は認めないわけには行かなかった。それは彼が六つの時に祖父と三人で住むやうになってから、殆ど増減なしに淡いながらも今も尚続いてゐる氣持である。しかも今日までに彼は嘗つて一度もそれを明らかに意識に上ぼせた事はなかったのである。

然し十五六の頃自分でも多少危険を感ずる事はあった。然し左う云ふ場合でも彼の想像は常にお栄の方から積極的に来る事のみを考へて居た。そして左う云ふ場合、彼は必ず、其お栄に対し 左ういふ事の如何に徳義上恐ろしく且つ二人の将来を暗くするものであるかを説く自身を思ひ浮べて居るのであった。お栄の方は嘗つて、それらしい素振りを見せた事はなかつたのである。」

ここで述べられているお栄は、まだ祖父の妾で謙作の初恋の女であったというだけで、暗夜行路後編で明らかにされるような水商売出身の女とは、限定されていない。

なお、暗夜行路という題名や「時任謙作」という主人公の名が確定するのは、この「草稿28」である。

4. 「草稿36（資料）」には、

¹⁵「。お栄の事（失敗）で謙作が其善後策の為に信行から呼ばれて東上する。

その留守に水谷等来て花をし、水谷泊る。末松憤慨して諷す。

。謙作がお栄の事で鎌倉に行つてゐる間に要と水谷が来て花をして泊つた。

翌晩要が酒に酔つて帰つて来た。そして姦通した。（八月廿五日）」

などという後編のメモらしいものが書かれている。お栄は謙作が家を空ける用事をつくるための存在に過ぎず、それも満州まで行くのではなく、東京か鎌倉にいるわけで、ここにもお栄が水商売出身の女であるとは、まだ記されていない。

5. 以上を要するに、最初の構想段階ではお栄は考えられていなかった。次に實際生活の場の叙述に必要な女中を案出した。それは坂口の小説に出て来る四十くらいの容貌の悪い女を意識し対応させた女であった。第3段階では四十女と雇い女であることは引き継ぎ、それを祖父の妾とし、謙作の初恋の女ともして、十五六才頃に多少危険を感じた存在に設定したが、水商売の出身とは未だ決定しなかった。謙作ならぬ志賀の実生活で、十五六才頃に常に身边にいて危険を感じさせるような年上の女といえ、義母のお浩しかいない。彼女は亡母より遙かに美しく、まだ二十六七才の若さである。わがままな志賀に一度も不平不満を言わせなかった思いやりの深いこの義母に、心身ともに初恋を感じても、また、それがいつまでも、続いても不思議ではない。とすると、お栄のモデルは義母お浩で、祖父は父の直温ということになる。生母を正妻として神聖視し、継母を女と見て父の第二の妻と考えれば、妾ということにしてもおかしくはない。

暗夜行路本文でお栄が水商売の出身ということに創造し直されるのは、モデルを義母と想像されては実生活上多大の迷惑を生ずるので、吉原の女、「峯」の境遇を活用したのであろう。

草稿の段階では、後編のメモに至るまで、まだお栄は、峯ではなく、お浩がモデルである。

IV お栄の境遇

1. 「其処には祖父の他にお栄といふ二十三四の女が居た。」

と、暗夜行路序詞にあるが、謙作は母が病気で死に、二月半ほど経って根岸の祖父の家に引き取られ、そこで始めてお栄に出会う。

¹⁶「母が死んで三月しない内に自家では母の後を探しだした。」

「新しい母は二十三才で自分より十一才の年長であった。自分は此新しい母を心から愛した。」（下線筆者。この引用文は本文にはない。）

上記は「母の死と新しい母」の草稿で、志賀の事実そのままの記録とも考えられるものであるが、出会いの状況と女の年令からいうと、お栄は義母のお浩に重なる。

2. 「其甥と云ふ男は大酒飲みで、葉巻飲みで、そして骨まで浸み貫つた放蕩者で、たうとう其二三年前に殆ど明かな原因なしに自殺して了つたと云ふ事を私は二十年程してお栄から聞いた。」

序詞のこの文の一行前に「……或る年寄った教授の細君で、彼女の甥が嘗てお栄と同棲して

居た。」とあり、これと類似の経験を持つ女が「草稿13」にある。

「一年程で法学士だと云ふ男に身受けされて芝の山内に世帯を持つた。その男は大酒飲みで、又日に何本となく強い葉巻を飲むで只ブラブラしてゐる男だつた。而して実はまだ法学士になつてゐない学生だつた。」

この大酒飲みで葉巻飲みの男と同棲していた女こそ、志賀が「お栄の境遇は或女から聴いた其女の経験を出来るだけ利用した。」といている女で、日記によれば「峯」といい、「六つ年上の女」のモデルでもある。また、この女は吉原にいたとき老人に落籍されて、その妾となったこともあり、後述するように人生経験がきわめて多彩であった。

3. 「お栄は普段少しも美しい女ではなかつた。然し湯上りに濃い化粧などをすると、私の眼にはそれが非常に美しく見えた。さう云ふ時、お栄は妙に浮き浮きする事があつた。祖父と酒を飲むと、其頃の流行歌を小声で唄つたりした。そして酔ふと不意に私を膝へ抱え上げて、力のある太い腕で、ちつと抱き締めたりする事があつた。私は苦しいままに、何かしら気の遠くなるやうな快感を感じた。」と「序詞」に描かれたこのお栄は、「草稿13」の、信行（ここでは未だ謙作となっていない）が女遊びを始めてから1年半の間熱心に通つた吉原の女（日記には峯）即ち「薄あばたのある女で、美しくはなかつたが総てが大きく、リッチな感じのある女」と同じである。

薄あばたは、湯上りに濃い化粧をすれば、美しくなるであろうし、美しく見える自己を確信したときの女は浮き浮きもするであろう。酒を飲めばなおさらである。時として、同居の可愛い子供を抱きしめることも不思議ではない。美少年であつた志賀のことであるから、幼少時、家の女中や親戚の年上の女性その他によって、そういう経験はしばしば繰り返されたことでもあろう。

と同時に、義母のお浩の新婚二夜目。

⁴⁷「其晩だつたと思ふ。寝てゐると女中が父の使いで『今晚はこちらで御やすみになりませんか』といつて来た。自分は枕を持つて出掛けた。新しい母は寝たまま床を半分空けて『お入りなさい』と云つた。（中略）父が眠つてから母と話してゐると又女中が祖母からの迎ひでやつて来た。（中略）直ぐ夜着の襟に顔を埋め、眠つたフリをして静かに独り嬉しい気持を味はつた。」

と記されている、「母の死と新しい母」の「草稿」を見落とすわけにはいかない。

「序詞」の前掲の部分は、峯とお浩のダブルイメージで書かれたものと推定しても不自然ではないであろう。

4. 謙作は、祖父存命中からその死後も、お栄から二十年余り日常の行き届いた世話を受けるが、志賀も、お浩から、至れり尽くせりの心づかいを祖父の存命中から、その死後も、31才で結婚した後までも受けている。

5. 「彼は放蕩を始めてから變にお栄を意識しだした。これは前からも無い事ではなかつたが、彼の時々した妙な想像は道德堅固にしてゐる彼に対し、お栄の方から誘惑して来る場合の想像であつた。その想像では常に彼はお栄に説教する自分だつた。さう云ふ事が如何に恐ろしい罪であるか、その為めに如何に二人の運命が狂ひ出すか、そんな事を諄々と説き聴かす真面目臭い青年になつてゐた。しかもさふ云ふ想像をさす素振りがお栄の方にあつたわけではなかつたが、彼は時々そんな風な想像をした。」

暗夜行路前編第一の十一のこの箇所は、前述の「草稿28」の該当部分を改作したものである

うが、比較してみると、放蕩を始めてからお栄への肉体的誘惑を一層強く感じ始めている。それはさておき、本文に対応する「未定稿」がある。

¹⁸「尚自分は自分の母に対して漠然そんな気持（恋）であつた。それは母にも解かつてゐたかも知れない。……然し自分はよくこんな事を空想してゐた。若し母が自分に対して義理の子として以上の気持を示す場合があつたら、自分は母も父も妹も弟も自分も皆を非常に不幸に陥れる行為であると云つて自分の身を引かうといふ空想をした。これは恥づべき空想であつた。」

勿論この母は義母お浩である。48年の全集で始めてこの「未定稿」も公表され、志賀のタブーの部分が解明できるようになった。お栄の本質的な実体はお浩に違いない。

6. 「彼は蠣船から持つて帰つた小さい真珠を咲子へ送つてやつた。」(前編第二の七)

この真珠は、お栄への結婚の申し出に破れて蠣船料理を食べに行ったとき、舌の上に残った物で「口へ入れたものから、そんなものが出た所に何かしら幸福らしい気持が感ぜられた」貴重な物である。咲子は一番上の妹であるから、志賀の場合では英子にほかならない。義母への恋が異母妹に移つたのか、濃厚な肉親愛なのか。もっとも志賀は、妹たちをよく可愛がったし、英子は柔和でやさしく、また、大の兄思いでもあつた。

7. 後編第三の四で、夜行で兄の信行が来て、お栄が従妹のお才に勧められて、天津へ行って料理屋を始めたという話をする。同じく六で謙作はお才に会い「眼尻に小皺を作り、色の悪い歯ぐきを露はし、笑ひかけ、臆面もなく親しげに」自分の「顔へ眺め入」られ「参つ」てしまう。「兎に角お才は彼の想像以上に下品な女だつた」のである。

¹⁹ 峯は志賀に会う前、既に台北、京城、上海、香港、大連、天津と渡り歩いて来ており、二度目吉原を出てからは、七十二になる請負師の老人に落籍されたり、女優になろうとしたりした後、再び外地へ出かけた女である。そして、志賀を惹きつける要素を多分に持っていると同時に、少々の悪いことくらいは、平気でする女でもあつた。お栄とお才は、この峯の性質と経歴を分有し、お栄はリッチな方、お才は脚色もして下品な方に分けられたと考えることができる。

8. 後編第三の九に、外地へ行く前のお栄に、京都見物の案内をするところがある。峯にもお浩にも志賀はそういうことはしていないが、彼は結婚後間もなく、父と京都へ会いに来た英子を、父は拒絶して彼女だけに会い、京都の案内をした。

²⁰「京都駅に着いたら姉（志賀の妻・康）だけが迎えに来ていて、私達の泊る終屋迄一緒に来てから父宛てた手紙を出しました。それには『自分はまだ父上にお会いする事は出来ないが英子だけはよこして頂き度い』（カッコの注は筆者）と書いてあり、父もさぞ不快に思ったでしょうが、私の行く事は許してくれたので姉と一緒に兄の家に行きました。其晩泊って翌日は丁度来合せていた私の従兄と四人で初めての京都を案内してもらいました。」

と、英子の書いた「若い頃の兄志賀直哉の憶い出」にあり、更に同文中に、

「けれども私達にはいい兄で京都などに行くと必ずお土産を買って来てくれ、或る時は祖母以下皆にお扇子を買って来てくれましたが私のは金地に肉筆で白い鉄線の花を描いた立派なものだったので、嬉しくて大切に使いそれから六十年以上も経つた今でも持って居ります。又他の時には妹達にはお人形を買って来てくれましたが私にはわざわざ新しく作らせてくれたので、あとから届いて来ましたがとても可愛いお小姓姿の人形でした。」

と英子自身、志賀から他の肉親より特別に愛せられていた口吻を示している。

9. 志賀は愛する人への贈り物を入念に考える男で、謙作にもそれが現われ

「彼はお栄への餞別の品を見るために銀座の方へ行つた。時計に何か短かい、いい言葉を彫らせても面白いと考へたが、さういふいい言葉が却々浮ばなかつた。二三軒時計屋を念入りに見て廻つた。そしてその中から割りに氣持のいい流行遅れの型の物を選んだが……」と、謙作はお栄への餞別に流行遅れの時計を彼女にふさわしい物として選んだ。お栄は確かに古風で、時計のように常に謙作と共に在り、かつ便利で正確な女である。

なお、これには曰くがあり、「白樺」の明治43年9月発行第一卷第六号の「彼と六つ上の女」の初出には、女から十円札と時計をもらった彼が、コレクションの中から何を返しにしようかと迷った末、

²¹「彼は先づ煙管を出して見た。女持とは云ひながら昔物で今の男持程に太く、ガッシリした拵である。吸口の方に玉藻の前が桧扇を翳して居る所が象眼になつて居る。雁首の方は金で入つた九尾の狐が尾をなびかせて赤銅の星雲に乗つて空を翔けて居る有様である。彼は其鮮やかな細工に暫く見惚れて居た。而して、眼の大きい、鼻の高い、美しいと云ふより総てがリッチな感じを与える容貌をした女には如何にもこれが似合ふやうに思つた。」とある。お栄は流行遅れの時計に似た性格であるが、峯は反対に玉藻の前であり、九尾の狐である。

10. 後編第四の二に謙作がお栄を京城まで迎えに行く話があるが、そこに出てくる事件も、「草稿」十三の七、十三、十四、十五に書かれている女性（柝谷峯）の話によく似ている。

紅野敏郎氏も「ここに出てくる女は、ある部分、『暗夜行路』のお栄のイメージに重なる。」と断定している。

なお、暗夜行路本文の鉄嶺ホテルの女あるじ、増田という男まさりのしっかり者といわれる女性は、これも峯の分身であろう。

V お栄という命名

1. お栄という名は何となく古風な感じがする。漢字を音読して、その上に「お」をつけた呼び名は、暗夜行路中の女性では、お栄、お才のほか、お新さん、お金さん、お慶さんなどがある。「お」なしで「仙」もある。いずれも年輩以上の女性である。

志賀の実母は「銀」、義母は「浩」、2人ともそれぞれ上に「お」をつけて呼んだのであろう。

2. 明治43年3月20日の日記に、

「(前略)青木に会ふ。不図氣が變つて二人で吉原へ行つた。只グルグル歩いた。先の女に見つけられて妙な氣がした。いくらか自分は彼の女に惚れてゐるのだ。帰り飛の家へ行つてお栄と話した。」

とあり、同じく3月27日に、

²²「午後お栄のところへ行つた。」とも記してあって、「お栄」という名の女性は実在したようである。しかし資料が他に見当たらないので、それ以上は、わからない。

3. 「未定稿86」の「Barにて」には

²³「お栄ちゃんて、今度、自家の子になつた人だから可愛がらなくちやいけないよ」と、母の言葉があつて、熊谷の在の百姓の、姉と自分の2人の子どもの家へ、お栄という子が里子に来る話がある。

「お栄はいつもいい着物を着てゐて、それに東京からいい着物が来」るので、「姉はそれを羨しがつて」おり、「自分」も母を取られた嫉妬があつて、二人でいじめる。姉が「いまにあ

の児が本統の自家の児になつて、さうすれば、お前も私も他家の子にやられて了ふんだ」などと言って、姉と二人で、不平で泣いたりすることもある。しかし、「今思へば私は矢張りお栄に惚れてゐたんです」と「自分」も言っているとおり、「実は初恋を感じ」ていたのである。

紅野敏郎氏が同書の後記に「執筆年月日は記されていないが、明治42年と推定。」とあるのを信ずれば、前述の43年3月の日記のお栄とは、無関係のようである。

志賀が「峯」と始めて出会うのは、42年11月の初旬頃と日記から推定できるが、そうすると、このお栄は、同じように里子に出された経験のある「峯」のことをもとにして書いた創作かもしれない。

しかし、43年3月の日記で、「さきの女」と記してある、その「さき」とは、42年9月20日の志賀の遊蕩開始後のある時期とすれば、お栄という名の女のことになる。

4. 暗夜行路中の、お栄に類似した名は「栄花」である。「蝕まれた友情」によれば

「ところで僕達が本統に好きだつたのは娘義太夫で、豊竹昇玉に夢中だつたのだ。昇を Aufgehen と訳し、略してアッフと云つてゐた。」

とあって、この Auf が栄花である。志賀の変名法の一つは、同じ作品の中に

²⁴「僕は十二三の頃、同性愛といはれるやうな感情で君が好きだつた。一人でゐる時に頻りに君の事を想つた。君の名を漢音で読み、それを和音のあて字に書き直し、更にそれを漢音で別の字で書き直し、同締め裏側に書いて置いた事などがある。」

という方法である。これを Auf の場合に適用すると、「A」は「えい」となり、漢字に直して「栄」となる。そしてこの女が「昔の栄花、今の桃奴」なのである。なぜ「花」を添えたかは、よくわからないが、「花」という字は分解すると「ヒイキ」となるので、昔ヒイキにしたという意味で添えたものか、あるいは桃の「花」とも考えられる。

5. 「蝕まれた友情」に記されたような命名法で更に考えてみると、妹の英子は音読してエイ子、同音の漢字「榮」に置きかえて「お栄」となる。

なお、「榮」という字は、本義は桐木で、「英」に通じ「ハナ」の義、更に転じて「サカエシゲル」の意となり、「咲く」とも訓ずるから、その連用形「咲き」を用いて、お栄＝英子＝咲子となり、同一人物の変名と考えることもできる。

なお、峯の所にお咲という芸者がいた。

VI お栄が「少し型に終つた」原因

1. 「お栄が少し型に終つたやうな気がしてゐる」とは、既述のように、志賀自身の言葉であり、また多くの批評家の一致した見解でもあるが、「型に終つた」とは、やや具体的には次のようなことであろうか。

(1) 作品中に自立していない。

換言すれば、作者のカイライであり、性格・境遇・行動などが不統一であり、必要な説明や描写が欠落していることであり、仮構の必然が十分に展開されていない、などのことである。

このことは、主題の設定や構成、作者の創作の姿勢や態度などに関係が深い。特にお栄の具体的な創造過程に問題がある。

(2) すぐれた描写に乏しい。

直子の描写は、生彩に富んでいて、個性的である。が、直子より出番の多いお栄は、天津行きを別にすれば、明治の古風な家庭的女性の面影が感ぜられるだけで、積極性や個性はほとんど

見られない。

志賀のような体験・実感を基調とする作家には、「性格的には全然モデルなし」であったことに問題があるようである。

2. 志賀の暗夜行路創作の姿勢は、「続創作余談」にも述べられているように、前編の描写の方面は「時任謙作」なる旧稿をできるだけ利用しようとする算段のものであり、後編の方は純粹に暗夜行路のために書いたものである。

また、志賀は私情を超越して書くことに非常な抵抗を感じた作家で、自己や家族のためにならないと考えられることは、年令の進むにつれて次第に書かなくなった。

そのようでありながら、同時に体験・実感を基調とするとなると、家族をモデルに書くような場合、アイマイにしか描けなくなるであろう。

更に、「時任謙作」の起筆から暗夜行路の完成までに約四分の一世紀を要したことは、余りにも長期にわたったため、作者自身のその間の老熟が、謙作を始め作中人物を老成もしくは消極化させたとも考えられる。

特に構成上の必要から創造したと推定できるお栄は、そのやや不自然な構成の上に、上述の原因による消極化をまともに受けて、一見きわめて生彩に乏しい主要人物となってしまった感がある。

3. お栄の創造過程を改めて見直すと、

(1) 父との不和を主な素材として書いていた間では、お栄という存在は不必要で、その片鱗さえ現われていない。

(2) 坂口の生活や小説を、自己の内部の暗い部分の投影と感じ、それを嫌悪し、そこから脱出しようとすることを中心として書いているときは、坂口家の女中頭に対して、自家のおさんどんを意識的に配置したが、お栄とは雇い女であること、年令が似ているらしいことが共通するだけで、別種の女である。

(3) 父との不和を出生の秘密からの必然とし、阪口的生活からの脱却を文筆の本業よりは対女性関係で順次超脱する経過を構想したとき、幻想の対象として設定されたのがお栄であった。

祖父の若い妾で、謙作の初恋の女。そしてその女は、言わば養母でもあって、実母のようにわがままな彼を包みこむように愛してくれ、しかも今も傍らにいる。謙作の女性遍歴が情欲化するにつれ、妄想の対象にもなり、遂には結婚さえ決意する。しかし謙作の出生が祖父と母との不義の結果である上に、類似の不祥事を重ねることは、以てのほかということで父の断固たる反対にあい、かつお栄も同意しないので、結婚の申し込みは不成立に終わるわけであるが、志賀の父直温が後妻浩を迎えたのは、直温43才、浩23才、志賀は12才であった。父と義母の年令差は20年、義母と志賀とは11年ちがいである。不和が続いていた父を祖父に見立てれば、後妻浩は年の若い妾と見なすこともできる。また、思春期前後の男性からは、11才くらい年上の女は、秘めた初恋の対象となり得る。進藤純孝氏は

²⁵「むしろ『暗夜行路』に登場する祖父は冷たい親子関係の相手だった直温の分身と見た方が当たるかもしれぬ。」

といている。

(4) 後編でお栄が天津へ行ったり、謙作が失敗したお栄を迎えに行くのは、直子との結婚の邪魔者を追っ払ったり、あるいは直子が過失を犯す機会を設けるための便宜によるものである

う。

もっとも、志賀が1年半近く通い、多大の影響を受けた峯の経歴をやや強引にここに利用したとも思われる。「草稿38」の構想メモにあるように、お栄の行先は、天津でなく、東京か横浜でもよかった。いや、その方がよかった。天津まで行かせたので、お栄のイメージが、前編と後編でやや不統一になった感がある。東京や横浜としなかったのは、義母浩に想い至る読者を警戒してのことかも知れないけれども。

(5) 直子と同居時代のお栄は、善良な準姑、もしくは直子の相談相手で、時には謙作がその懷に抱かれたいと思う母性ではあっても、既にいわゆる女性ではなかった。

4. 「謙作の女性遍歴を通しての自我の確立」または「結婚に至るまでの女性遍歴」から考えると、

(1) 母とお栄への思慕と、祖父と父への反撥が「序詞」に見られるが、お栄へは、異性的愛情の端緒が既に明瞭に示されている。

(2) 前編第一の十には、お栄の母性的愛情が示され、五には、愛子とその母に、亡母の精神的愛情を幻影化して失望し、登喜子は異性として惹きつけられるが、謙作を特別の人とは考えてくれず、加代は積極的愛情を示すが、下品であり、娼婦たちは金銭を媒介として謙作の求めに応ずる女に過ぎない。

謙作の孤独を心から慰め得る異性は、ひとりお栄だけである。娼婦の乳房に「豊年だ」と叫ばせた実質を備えていたものは、お栄だけであった。

(3) 直子は妻ではあるが、母ではない。過失さえおかす女性一般である。甘えるどころか、謙作の方が心を広大にして許さねばならぬ存在である。謙作が徹底した自己鍛練を断行して、強固な自我を形成しなければ、一体となり得ない女性である。終末、謙作と直子は、自然という存在の基盤に悟入することによって一体感に到達するが、それは謙作が瀕死の状態になって、始めて得られたものである。

(4) なまの謙作が心から求めた異性は、母性的で実生活向きでもあるお栄であろう。志賀の実生活からいえば、生母の銀よりは、むしろ義母の浩であると思われる。

5. お栄のモデルは、境遇上では「榎谷峯」であったに違いない。更に峯は、気むずかしい志賀を惹きつける人間的魅力をもった女性であり、そのリッチな感じもお栄に移されている。

しかし、峯はお栄のように上品でもなく、おとなしくもなかった。実生活向きでもなかった。

峯の性格の好ましい部分と、義母浩の性格を重ね合わせたところに、お栄の性格上のモデルが考えられる。

妹の名、英子の英の字音を借りてお栄に通わせたのは、義母の名は余りにもタブーであるからであろう。

「日記」にある梅の家のお栄や「未定稿86」のお栄ちゃんについては、資料不足で言及のしようがないが、恐らくは余り関係がないのではなからうか。

お栄の性格上のモデルを、性格のかけ離れた峯と浩に求めたことが、「少し型に終った」最大の原因と考えられる。

参 考 文 献

- 1) 正宗白鳥：近代小説研究作品・資料，189，秀英出版（1969）

- 2) 中野重治：志賀直哉集，425，筑摩書房（1968）
- 3) 志賀直哉：志賀直哉全集八，20，岩波書店（1973）。（以下全集と記す）
- 4) 谷川徹三：日本文学研究資料叢書，「志賀直哉」197，有精堂（1970）
- 5) 志賀直哉：全集十，470.
- 6) 関 良一：日本文学研究資料叢書「志賀直哉」261，有精堂。（1970）
- 7) エドウィン・マクレラン：同上，296.
- 8) 鹿野達男：志賀直哉，283～284，金剛出版（1975）
- 9) 安岡章太郎：志賀直哉私論，350，読売新聞社（1976）
- 10) 安岡章太郎：同上，221，231.
- 11) 三好行雄：作品論の試み，109，115，116，101，至文堂（1967）
- 12) 紅野敏郎：全集六，370.
- 13) 志賀直哉：同上，86.
- 14) 志賀直哉：同上，339.
- 15) 志賀直哉：同上，346.
- 16) 志賀直哉：全集一，576，579.
- 17) 志賀直哉：同上，578.
- 18) 志賀直哉：同上，566.
- 19) 同全集，136～174参照.
- 20) 志賀英子：若い頃の志賀直哉の憶い出（志賀直哉全集月報10）
- 21) 志賀直哉：全集一，592.
- 22) 志賀直哉：全集十，362.
- 23) 志賀直哉：全集九，363～366.
- 24) 志賀直哉：全集四，244.
- 25) 進藤純孝：志賀直哉集，日本近代文学大系31，29，角川書店（1966）